

お役に立ちたい

川上桃子

一九九九年九月二一日、台湾中部でマグニチュード七・六の大地震が起きた。犠牲者数二三〇〇人以上にのぼったこの震災の発生を、私は東京の自宅で知った。テレビニュースの画面に、無惨な瓦礫の山が延々と映る。突然の激震に家族を奪われた人々の姿に、涙があふれた。

そうだ。台北に暮らした二年を含めて、台湾と関わりをもつようになってから今まで、私はいつも台湾の人たちの暖かさに甘えるばかりだった。今度は、私が被災した台湾の人たちのお役に立ちたい！複数の援助団体に連絡をとり、あるNGOが派遣する緊急医療チームのコーディネーター兼通訳として被災地に向かうことが決まったのは、地震発生から三日目のことだった。

お役に立ちたい！その気持ち微妙な空回りをはじめたのは、台湾に飛び、現地ボランティア団体が設けた救援センターを訪れたときだった。日本では救援活動の遅れがさかんに報じられていたが、実際には、地震発生直後から、台湾各地の救援グループが被災地に続々と駆けつけ、いち早く医療活動を立ち上げていたのだ。外国からやってきたNGOは、手持ち無沙汰な顔で、仕事の割り当てを待っている。

今回私が行動をとりにしているN医師と

O看護師は、救急医療の経験豊かなベテランで、激務の合間をぬって台湾に駆けつけてきている。お願いです、この二人を皆さんのお役に立たせてください！私の顔に焦りと懇願の表情が浮かんでいたのだろうか、その翌日から、ある慈善団体の医療チームに合流して、甚大な被害を受けた南投県中寮郷での救援活動に加わることになった。

現地での活動を始めると、今度は、私たちの活動に募金をして下さった日本の支援者の方々の期待に応えるためにも、「お役立ち」の実績をつくらなければならないというプレッシャーを感じるようになった。

地震発生からすでに五日。山間部に点在する被災地には大きな医療ニーズがあるはずだが、道路が寸断され、一般の支援団体は立ち入れない。そのため、アクセス可能な被災地に多数の救援グループが集まっている。ここ中寮小学校の避難キャンプに限って言えば、医療サービスの供給が需要を上回っている状況だ。我が医療チームの診察者数が決して多くないという現実には、奇妙な焦りが募る。

「お役立ち」実績をめぐるプレッシャーは、インターネットを通じて日本の他の救援チームを意識するかたちでもめばえた。

私がNGOの本部に送る救援活動報告は、東京のスタッフによって随時ホームページにアップされる。彼女たちはまた、時々刻々と更新される他の団体のページを見て、その活動状況や診療者数を教えてくれる。よそのチームの「実績」が気にかかる。

活動の場をみつけれずにいる日本の救援チームが時折訪ねてきて「お役に立てることはありませんか？」と声をかけてくる。一緒に汗を流したいと思うのだが、私たちも、台湾の支援団体の活動拠点に居候する身。「ここはまあ間に合っているようですよ」と答えながら、ライバルの出現を牽制する失業予備軍のような気分を味わう。

一日の活動を終え、医療テントの後片付けをしながら、ふと考える。私はここで、いったい何をしているのだろう。よその国の非常時に、私のような素人がお役に立てることなんて、初めから何もなかったのかな。いや。遠からず、日本で台湾大震災の記憶は忘れられてしまいうに違いない。ずっと先のようにいて、遠からず訪れるそんな時にこそ、この悲惨な災害の記憶を語り継ぐために私にできる、本当にお役に立てることを見つけたい。

(かわかみ ももこ/アジア経済研究所 新領域研究センター)